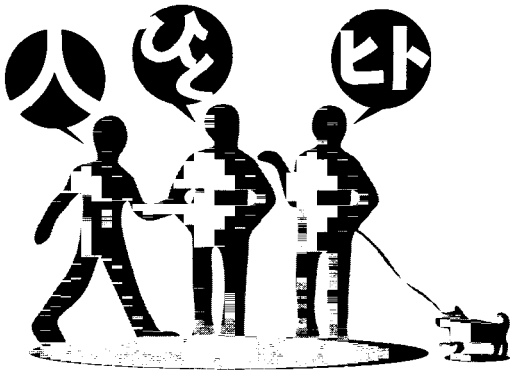

宝崎　幸子先生【美唄】

診療生活を離れて
（現役生活を退いて考える事）

宝崎幸子先生は，診療生活48年の長きを経て，ご健康にして診療所も繁栄しておりましたが，期する所あり，本年４月から現役を退かれ落ちついた生活をおくられています。去る８月29日義弟の館　正幸先生を68歳でなくされての悲しみの中，また大変お忙しいにも拘らず，このたび過ぎし診療人生を振り返っていただきました。

Q．（問いかけ）：大変激動の時代の，別の言葉で表現するならば，充実した診療人生だったと思いますが，振り返ってみていかがだったでしょうか。

A．（ご返答）：長いようで短かったというか，48年間はあっという間に過ぎ去っていったような気がします。戦前・戦中・戦後を，とにかく夢中で過ごしてきました。そして，そのことは，自分一人では成し得ず，主人と亡き母の助けがあったればこそなのです。

Q．仮定の話として，もう一度生まれかわっても同じような人生を歩もうと思いますか。

A．私達の仕事は，一言でいえば人助けだと思うのです。私にはこの仕事しかできないので，同じ道を進むかと思いますが，反面，歯や口のことよりも「普通の主婦をやりたい！」と考えない訳でもありません。しかし，やはりこの仕事の方が，重みやりがいがあります。

Q．診療をやめたあとも美唄市の教育委員や市の合唱コーラス部にも加わるなど，結構お忙しくお過ごしのようですが…。

A．いずれも，素晴らしい仲間に恵まれてとても幸せです。両方共人と人のつながりが大切で，人間関係の最たるものといえます。前者は教育は人なりに則ってその重要性を嫌というほど教わり，プラスになることが多く，自分なりに成長したと思っております。合唱のハーモニーも一人一人ではその醍醐味は味わえず，美しいハーモニーも生まれえません。

Q．これからの夢，希望といったら何になるのでしょうか。素晴らしく恵まれた環境で，沢山おありかと思いますが…。

A．月並みですが，現在の健康状態（心と体）を保持しながら，晴耕雨読というか日々是好日の生活を送りたいと思います。実際今まで読み残した本が数々あります。また家の回りには，四季を通じて仕事は山程あります。かつて亡き母が，常々いっていたように，「庭に鋏の音がしないのは，山の木のようだ…」と。そして，遠くにいる３人の小学生の孫達との触れあいの時を，多く持ちたいと思っております。

Q．生涯現役の診療生活とはどのようなもので，それは可能なのでしょうか。歯医者にハッピー・リタイアメントはあるのでしょうか。拘束されず自由で解放された精神状態とは，さぞかし素晴らしいものなのでしょうね。

A．今の状態になってつくづく思うのは，日頃私達の仕事は，自分ができなくなった時が終わりの時で，まだやれるのにやめるというのは，患者さんに対する冒とくと思っていました。しかし，このたびの義弟の突然の訃報に接すると，やはりある年齢になれば，自分の体力，気力，環境，立場など考え，踏ん切りをつける必要があると思いました。

本日はお悲しみの中，甚だ立ち入った質問ばかりで大変失礼申し上げました。今後共，お元気で会と会員のためにご指導宜しくお願い致します。

（文責　小森英世）

宝崎邸庭園